容貌受容尺度の作成

仁平 義明
（東北大学文学研究科）

容貌など身体的外見へのカセクシスには、近年、性別のボーダーレス化に向かう変化がみられる。たとえば、DSM-Ⅲ-RからDSM-Ⅳへと神経性無食欲症の男性発症率が少しずつ上昇してきている。また、日本の大学生でも、歯科矯正を希望する理由では、性差が消失し、男女ともに圧倒的に「外見」が理由になってきている（仁平、1997）。本研究では、自己の容貌をどれだけ受容しているかを測定する尺度を作成し、容貌受容が歯科矯正にどう影響しているかについて検討することとした。

＜方法＞

1）　容貌受容尺度

Rosenberg (1965)のSelf-Esteem Scaleをベースに、自己の容貌の受容度をみる10項目を選定した。「私の顔には、どこか一カ所は魅力的なところがあると思う」「私の顔は、人並みには、よい感じの顔だと思う」「私の顔は、このままでよい」など、５項目のPositive項目と、「私の顔は、あまり人に見せたくない」「なんでこんな顔に生まれたのだろうと、いやになる」「自分の顔は、できるものなら変えたいと思う」などNegative項目５項目である。「つよくそう思う」から「ぜんぜん思わない」の４段階評定。

2）　歯科矯正治療についての質問紙

矯正治療の希望、理由、受診へのバリア、治療経験、時期・場所、治療への満足度等。

3）　調査対象

心理学入門の受講生。東北地方の国立TH大学の男女学生（出身は全国に分布）、同じ市内の私立M女子大学生（ほとんどが東北地方の出身）合計251人。平均年齢19.06歳（*SD* 2.49）。

＜結果＞

1）　容貌受容尺度項目の因子分析と尺度の信頼性

10項目の因子分析を行った結果、「容貌受容」因子、「容貌変化欲求」因子の２つの因子が抽出された。ただし、全10項目の尺度得点の信頼性は、α=.882と高い内的整合性を示し、10項目を一つの尺度とする適切性が確認された。

2）　大学生と歯科矯正治療

大学生で、これまでに歯科矯正治療を受けたいと思ったことがある割合と実際に治療のために受診した割合は、TH大女子学生で57.7%（受診率24.5%）、男子学生で31.0%（受診率14.0%）であった。M女子大学の学生の希望率は49.0%（受診率19.4%）であった。

3）　容貌受容と歯科矯正治療

容貌受容が歯科矯正治療を希望する有意な要因になるかどうかは、容貌受容尺度の妥当性の検証の一つの手段になる。上記の３群の矯正治療希望の有無による容貌受容尺度得点の違いについて分散分析を行った結果、希望の有無及び群の主効果は有意であった。それまでに歯科矯正治療を希望したことのある大学生ほど、自己の容貌に拒否的な傾向がつよい（図１）。

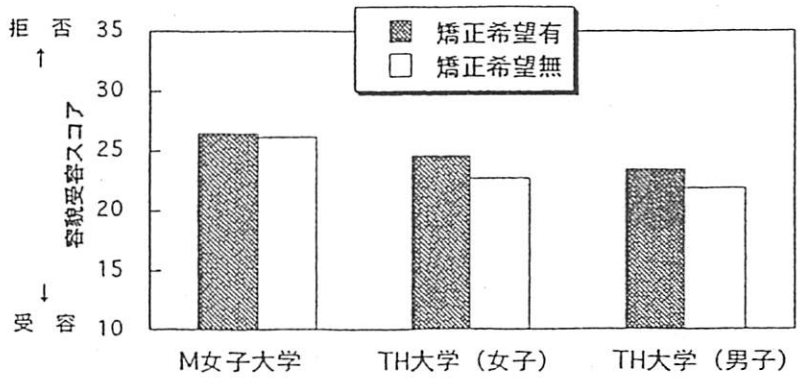

図１　「歯科矯正治療の希望」の有無による大学生の「容貌受容尺度」得点の差.